東京大学宗教学年報 XXXVII　特別号（2020 年）125-132 頁

宗教現象学について
―シカゴ大学ディヴィニティー・スクールでの学びを通して―

永見　勇

聞き手：江川　純一，奥山　史亮，木村　敏明，
久保田　浩，藤原　聖子，宮嶋　俊一
（2016 年 12 月 28 日，於 立教大学）

永見：宗教学の研究者の皆様とお話しをする機会を与えていただき感謝いたします。
宗教現象学に関することを話す前に，個人的な生活環境を語らせてください。
小生は 1941 年，キリスト教の牧師家庭の三男として生まれました。物心がついた頃から，両親の宗教活動と，ある距離をとりながら，なぜ両親はこのような世界に自らを献げるのかといった疑問を抱いたことを思い出します。学部は宗教とは全く関係のない名古屋工業大学で高分子と流体力学といった分野を学び，一時企業に勤めたことがありました。
1968 年，あるきっかけを通して米国のクエーカー関係の施設で，留学生活（1 年）を送る機会を与えられました。その後，その研究所の紹介で，神学の修士課程が新設されたアーラム・カレッジで学びました。両親のキリスト教への関わりが，新たな人生の歩みに導いてくれたものと理解しています。アーラムでは「バルトと西田思想における啓示と純粋経験」というタイトルの修士論文を書きました。その際，こうした究極的意味の探求は，それぞれの人間が運命的に出会った言語や文化の枠組みに最終的に影響を受けざるをえないのではないかという疑問を持ちました。この疑問は，シカゴ大学で，現象学や解釈学を学ぶきっかけを与えてもらったと思っています。

藤原：シカゴにいらっしゃったのは何年から何年のことでしょうか。

永見：1972 年から 1977 年の 5 年間いました。
当時のシカゴ大学のディヴィニティー・スクールは新約聖書学，旧約聖書学，キリスト教史学，神学，宗教史学，宗教と社会，文学・心理学，などの 7 分野の領域が開講されていました。それぞれ皆ユニークな分野でしたが，小生は神学関係と社会学関係を中心に受講いたしました。当時，神学分野は伝統的神学言語を学びながら，同時に，伝統を超えて，新たな神学言語を模索していくような授業が多く開講されていたように思います。とりわけ，アウシュビッツにおけるユダヤ人の惨状が明かされるにつれ，伝統的キリスト教神学に対する厳しい疑問を投げかける授業がありました。

伝統的な神学言語の何が問われたのか

永見：キリスト教史学者，ウイリストン・ウォーカーは『キリスト教史』の中で，ローマ帝国時代の初期キリスト教の働きを次のような言葉で説明しています。

時代の要請に応ずべき宗教は唯一の正義の神を教えるものであり，しかも善悪の多数の霊に対して位置を与えるものでなければならないということである。またそれは，，，神の意志の明確な啓示，すなわち権威ある経典を所有しなければならない。またそれは，神の意志と性質とにかなう道徳的行為に基づいて，現世否定の美徳を教え込むのでなければならない。またそれは，報償と刑罰とを伴う未来の生活を提供するのでなければならず，また，象徴的な入信の儀式を有し，真の罪の赦しを約束しなければならない。またそれは，ひとびとが一定の聖礼典的な行為によって，合一することができるような救い主なる神を有し，すべての人，少なくともその宗教の信奉者がすべて兄弟であることを教えねばならない。（W・ウォーカー『キリスト教史 1 古代教会』菊地栄三・中澤宣夫訳　ヨルダン社 34 頁）

初期キリスト教は，以上の宗教的意味付けを育みつつ，ローマ帝国で，多くの信奉者を獲得したといっています。ウォーカーはもちろん，歴史のその時々で，キリスト教が起こした不正な行為を史実として記述しています。ただ，奴隷や剣闘士，あるいは子殺しなどが日常的に認められていた当時のローマ帝国で，神の前には誰もが平等であると主張したキリスト教の立ち位置は，厳しい弾圧にも関わらずローマ社会を変えていったというのです。そして，国教という位置づけまで獲得しました。

キリスト教は以上のような歴史を歩みながら，次第に，ニケア信条のような教義や聖礼典的営みを生み出しました。三位一体論という教義の確立と共に，正統主義神学が制定されていったのです。その教義が示す世界観と人間観は，ヨーロッパのほとんどの地区に取り入れられ，教会の存在意義を主張しうる社会状況を作りました。その神学は時代と共に，その内容が批判され，修正され，変わっていきましたが，その基本枠は 19 世紀まで変わらなかったのが，欧米社会でした。これはある意味，驚くべきことです。キリスト教の教えには，人類にとって大切な宗教的意味が内包されていたことは間違いないでしょう。しかし，19 世紀になりますと，科学技術の発展と共に異文化接触の機会が与えられ，神学者自らがキリスト教神学が陥りやすい問題に気づくようになりました。

神学の何が問われたのでしょうか。それを端的に表現しますと，正統主義神学を通して意味づけられた「イエス・キリストの身体としての教会」と「聖餐式」を通して罪が許されるというキリスト教の聖礼典的な立ち位置と，それを世界に伝えようとする姿勢に疑問が向けられたということでしょう。キリスト教が世界に広まったことは，その立ち位置が，多くの人々を霊的救済に導いたからだと思います。しかし，その立ち位置を金科玉条のように捉えながら，世界にその教えを広げようとする行為は，時に，帝国主義的と批判されてしまう状況を作ってしまったのです。

ヨーロッパではキリスト教の教義を離れて，様々な文化に見られた宗教現象を認めつつ，それらの現象から現れる意味を追求する神学者が現れました。シュライエルマッハーやディルタイは自由神学や精神科学という立ち位置を主張し，ルドルフ・オットーは

宗教学という分野を生み出しました。こうした動きは，キリスト教の相対化の動きとして理解できます。

キリスト教を相対化する営みは米国でも現れます。1893 年シカゴ万国博覧会が開かれました。シカゴ大学はこの万博開催にあわせるように設立されました。この万博はまた世界の宗教者を集めて宗教会議を開いたことでも注目されます。欧米の知識人が，ある意味，初めて，世界の様々な宗教者の生の声を聴く機会が与えられたからです。シカゴ大学ディヴィニティー・スクールはそうした社会状況の中で，設立されたといえます。米国ではディヴィニティー・スクールは自由神学的雰囲気の強い教育機関と理解されるのは，シカゴ万博が関係していたからだと思います。

キリスト教に対する厳しいまなざしは，第二次世界大戦後にさらに高まっていきます。福音書に描かれたイエスに対する磔刑とユダヤ人の関わりが，ユダヤ人に対する西欧キリスト教の厳しい態度を生み出しました。この態度をキリスト教の負の遺産として疑問が投げかけられるようになります。アウシュビッツでのユダヤ人の証言はキリスト者に衝撃を与え，教会も聖書学も神学も，伝統的立ち位置を超える必要に迫られていたのです。

カトリックは第二バチカン公会議で，他宗教の救いの営みを公式に認めました。プロテスタントは，エキュメニズムという運動を通して，他教派や他宗教の存在を認めるようになりました。そして，1970 年代の初頭，シカゴ大学のディヴィニティー・スクールに入学したときには，ラングドム・ギルキー，デービット・トレイシー，ギブソン・ウィンターなどの神学者，社会学者が新たな神学・宗教言語を打ち立てようと努力していました。更に，ポール・リクール，H-G・ガダマーなどの著名なヨーロッパの哲学者，あるいはミルチァ・エリアーデのような宗教史学の泰斗を招聘し，極めてグローバルな学的雰囲気を感じさせる学びの場がディヴィニティー・スクールでした。これらの学者は，それぞれの立ち位置と知的役割は異なります。しかし，現象学や解釈学の流れを通して，人間や社会，宗教を理解しようとする点で，共通の関心を分かち合っていたように思います。様々なゼミや公開講演会に参加する中で，あるいは学友との議論を通して現象学や解釈学について考える時間が与えられました。

ディヴィニティー・スクールでの諸先生との関わり

シカゴ在学中，直接指導を受けたのはウィンター教授とギルキー教授でした。リクール，エリアーデ両教授は時折行われた公開講演会に参加したというだけの関係でしたが，帰国後，お二人の思想を学びました。

1975 年頃だと記憶していますが，ハイデッガーの後継者と目されていたガダマー先生が 3 ヶ月間，ディヴィニティー・スクールに客員教授として滞在されたことがありました。ハイデッガーと格闘していた時期でもあり，教授の講演を何度も拝聴しながら，個人的に質問をさせていただいたことを思い出します。トレイシー教授は，直接の指導を受けませんでしたが，80 年代初頭，ホワイトヘッド関係の国際会議が京都で開かれましたとき，宗教言語の基本となる隠喩表現とプロセス神学の関連を議論させていただきました。

72 年の秋，ディヴィニティー・スクールに入学したとき，ウィンター教授がフラン

スから帰米されて「宗教と社会」のゼミが開かれました。20 名程度の受講生がいましたが，数ヶ月後には，7，8 名に減りました。はじめに読んだヘーゲルの『精神現象学』の言語になじめなかったのだと思います。なぜ，「宗教と社会」のゼミでこのような本を読むのかと疑問を発しながら，ゼミを去った学友を思い出します。語学力に劣る自分は不満などを持つ余裕すらなく，ただ，ひたすら本を読み，学友の議論を聞くという状態でした。

ウィンター・ゼミで関わったメンバーとは，その後 4 年近く共に学生生活を送りました。その最後の年，ウィンター教授はシカゴからプリンストンに移られました。ギルキー教授がすぐに後任の指導に当たってくださり，引き続き現象学関係の研究に従事できるようになりました。ギルキー教授は第二次世界大戦中，ご両親が中国で宣教師であった関係上，日本軍に捕らえられ，捕虜収容場で数年間過ごされた経験をお持ちの方でした。当時，伝統的な神学言語を離れて，現象学的流れの中で，新たな神学言語を構築しようと，努力しておられました。1970 年に出版された *Naming the Whirlwind: The Renewal of God-Language* はその努力の結晶だと理解しています。その後，ウィンター教授の指導も受けながら，ギルキー教授の主査の下，博士論文を書き終えることができました。

ウィンターとの出会い

ウィンターはハーバードを卒業後，聖公会の司祭教育を受け，第二次世界大戦中，チャプレン職に従事されました。その後，構造機能主義のタルコット・パーソンズの下で学ばれ，博士号を授与された社会学者でした。その後，彼は困難な生活に追いやられた人々に関わるコミュニティ活動に従事していましたが 1956 年にシカゴ大学ディヴィニティー・スクールの教授として迎えられます。その社会学者がなぜ『精神現象学』をゼミで読んだのか疑問が残ります。ゼミでは，この本を半年間かけて読み，その後，ハイデッガーの『存在と時間』を 2 年の時間をかけて読みました。同時に，現象学や解釈学に関わる様々な著書を読み続けました。

当時，宗教と社会の関係といえば，マックス・ウエーバーやデュルケムが思い出されます。デュルケムは実証主義的流れの中で，社会的事実という考えを提唱し，社会と宗教の関係を論じましたが，ウエーバーは人間の行為を意味づける宗教的信条に着目しながら社会の有り様を議論した点で，異なります。しかし，両者は自らの立場を「客観的，中立的」立ち位置と理解し，そこから宗教や社会の関係を論じている点で共通しています。この立ち位置は基本的にデカルトの心身二元論の立場を示唆し，科学的思考に通じる観察者（主体）としての立ち位置です。

ウエーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』やデュルケムの『自殺論』を振り返ってみますと，両者は哲学や神学のような思考を取り込んでいません。彼らはあくまで社会科学的立場を堅持しながら，客観的観察者として宗教と社会の関係を論じます。両者は共に，プロテスタントとカトリックという 2 つのキリスト教の集団に関心を注ぎました。ウエーバーはプロテスタント諸国とカトリック諸国の比較を通して，資本主義体制のあり方や合理的官僚体制の違いを論じています。デュルケムは社会的事実として捉えたカトリック集団とプロテスタント集団のエトスの違いを通して自

殺率の違いを説明しています。こうした論じ方は社会政策や行政組織に従事する人にとってはとても参考になる思考方法です。しかし，ウィンターはそうした思考の流れに与することができなかったのだと思います。チャプレンとして今まさに戦場に行く人々に出会い，宗教者としてどのように兵士と向き合えばよいのか，苦しまれたのかもしれません。

ウィンターに突きつけられた問題，「喜び，悲しみ，救済を求め，苦難する人々」に社会（教会）はどう対応すべきかという問題を抱えつつ，「宗教と社会」の担当教授としてシカゴ大学に迎えられたようです。そうした状況の中，彼はメルロ・ポンティーの著作に出会い，1970 年初頭，フランスで 1 年間，研究生活を送られます。そのとき，メルロ・ポンティーから，彼の問いかけを紐解くにはハイデッガーが重要だと推薦されたとのことです。

フランスから帰米された直後，小生はディヴィニティー・スクールに入学し，それ以来，ウィンター教授と数人の学友と共に，現象学や解釈学の知見を学ぶ機会を与えられました。

宗教研究にとってハイデッガーはどのような意味を持つのか

私たちは自己紹介をすることがあります。「名前や職場，役割，組織，家族構成」などの社会的属性や「日本人，仏教徒，あるいは趣味」といった文化的属性を通して自己を紹介していきます。こうした紹介は私たちに秩序だった生き方を保証し，簡単な言葉でその「人」を理解できるようにしてくれる大切な社会の営みです。

しかし，現象学や解釈学の立場に立つ人は，上記のような人の理解に疑問を投げかけるかもしれません。というより，名前や所属機関を通して紹介する「あなた」という「存在」はどのような存在かと問いかけるかもしれません。この問いかけは日常感覚では突拍子しもない質問と受け取られます。しかし，私たちは時折，そうした問いを発する状況に出会うことはないでしょうか。

重篤な病にかかった時や，大震災に出会って家族の命を失ったとき，自分はどうすればよいのか，なぜ自分はこのような状況に遭遇したのかと自問自答するかもしれません。これらの問いかけは自己自身の今後の生き方や自己の存在意義を問いかけるきっかけとなるかもしれません。

解釈学的現象学者と呼ばれていたハイデッガーは，人間存在の有り様を徹底的に問いかけ，その存在から現れ出る現象的様態を解釈しながら人と世界の関わりを描いた人物だと理解しています。ただ，ハイデッガーは「自分と他者」といった関係枠を通し人や世界を語ることはありません。「私」とか「人間」とかいった表現も全く使わず，彼独自の言葉を通して人の存在の有り様を語るのです。彼は，「問いで始まり―問いで終わる」という流れで自己の論を展開した人です。この流れには彼みずからも含む人の有り様を明らかにしようとする姿勢が見られるのです。実際，彼は人の存在を Da-sein（そこにある存在，現存在）という言葉で語り，また In-der-Welt-sein（世界－内－存在）という言葉を通して「人」のあり姿を語ります。誠に不思議な言葉です。

ハイデッガーは 20 世紀を代表する哲学者の一人といわれます。しかし，彼は最初に神学の世界に身を置いたことがあります。すぐに神学言語の世界を離れますが，彼は伝

統的なヨーロッパ哲学の流れにも問いを発し，距離を置きます。神学，哲学，科学という一連のヨーロッパの思考体系を西欧形而上学として捉え，ソクラテス以前の世界に還ることを主張したのです。これら伝統的思考では「人の存在」の本当の姿を露わにできないと考えたのかもしれません。とすれば彼はどのように人の存在を理解しているのでしょうか。それを知るには，『存在と時間』を時間をかけて読んでいただくしかないと思います。彼の言葉は一つ一つが隠喩的色彩を帯びており，その言葉に触れる以外，彼の思想を理解することは難しいと考えるからです。ここでは，ハイデッガーの重要な言葉の一つ，Da-sein（現存在，そこにある），にこだわり，その言葉が指し示す意味を自分なりに解釈してみたいと思います。

私たちは自分自身を一人の「人」と理解します。ハイデッガーは「人」という言葉を全く使用せず「現存在」という言葉で語ります。この「現存在」という人の捉え方は，日常の言語感覚で捉えられない「人の存在」の有り様を隠喩的に伝えようとした造語ではないかと思っています。

「主体としての私と他者」の二極対立を前提に，人のあり方を語ったヘーゲルの立ち位置に同調する一文が『存在と時間』の中にあったと思います。このことから「現存在」と表現される人の存在はその時々の時間の流れで，自己自身を露わにし，変容する動的存在という意味が含まれているように理解できます。さらに，人の存在の始まりを日本人とか，中国人といった国名で語ったり，何々家といった家族の名前を通して語ることがありますが，ハイデッガーはそうした社会・文化属性を帯びた言葉では人の存在の始まりを捉えられないと，いっているように思います。「現存在 Da-sein」という言葉は，人の意志や努力，社会や文化の働きを超えた「神秘的何か」の働きの中で，人は世界に投げ出され，顕れ出る存在といっているようにも理解できます。

私たち一人一人は，それぞれが運命的に出会った特定の時間と空間の流れの中でその存在が与えられます。その存在は時間のその時々で，様々な有り様を顕現しながら生きていることに『存在と時間』を通して気づかされます。そしてその存在は常に，いつも「世界の内に存在」する命に限りのある有限的存在であり，歴史的存在であることに気づかされます。「生きるとは，死に向かうことである」というハイデッガーの言葉がそのことを象徴的に物語っています。

その時々で，他者に向かって様々な情動的感覚を伴う意識が投げかけられ，関わりながらみずからを露わにするのが「現存在」です。そうした情動的意味を帯びた意識の働きをハイデッガーは「Sorge」という言葉で語ります。この言葉は「配慮，心配，関心」といった意味を帯びており，主観－客観といった枠組みでは理解できない意識の流れだと思います。現存在はその時々で「Sorge」を伴いながら，自らの存在を開示していきますが，時に「Nichts, 無」という感覚に遭遇するときがあるといいます。そのとき，現存在はいわば死の境地に遭遇するわけで，その遭遇は「不安，Angst」という情感を立ち現せます。

『存在と時間』は文化・社会・歴史などの言語属性の枠組みを離れて，誰でも直面しうる，人間の普遍的な有り様を現象的に表し，解釈した著書だと思います。人類は様々な人間のあり姿を宗教言語や行為を通して語り継いできました。ハイデッガーは神といった宗教言葉を全く使用せず，人の有り様を現象学的に描いた思想家ではないかと思っています。

リクール，エリアーデそしてガダマーの立ち位置

ポール・ティリッヒはキリスト教が語りついできた「原罪観念」をハイデッガーの不安の考えを通して再解釈したことがあります。リクールはハイデッガーの現存在の語りを「近い道」と語り，自分は「遠い道」を歩むと言ったことがあります。その意味は，ハイデッガーは確かに人間の根源的な姿を語っているが，その語りは難解な現象学的言葉で語った道である。自分は人類が著してきた様々な古典や宗教書を通して，人々の生きた姿を読み起こし，そこから人間存在のあり姿を理解していくと言っているように思います。

20 世紀，新約聖書学の世界に様式史的研究を取り込んだ，ルドルフ・ブルトマンが福音書から神話的語りを排除し，イエスが本当に語ったとされる言葉を見いだそうと努力しました。非神話化と呼ばれる研究方法です。リクールは『聖書解釈学』で，神話の重要性を指摘しています。ブルトマンの科学的・合理的思考の流れに対して，解釈学的現象学の流れを通して聖書の神話的物語を再解釈したのです。リクールはエリアーデの宗教史学の立ち位置を評価したことがありました。それはエリアーデもまた，解釈学的現象学の流れに影響を受けた思想家だからだと思います。シャーマニズム，ヨガといった宗教事象や石や月，太陽などの自然物を通して「ヒエロファニー，聖なるものの顕現」とか，「クロファトニー，力あるもの」という言葉で宗教現象を語った態度は，リクールのそれと似ているように思います。

リクールとエリアーデは，「研究者と宗教対象」という二項対立の枠組みを維持しています。その点ではハイデッガーとは大きく異なります。しかし，両者は様々な自然物が時に，宗教的意味を帯びる現象的側面を認め，その意味を解釈するという解釈学的現象学の流れを取り込んでいると思います。

リクールは太陽，月や星などが宗教的意味を帯びるのは，それらが象徴的意味をみずから開示するからだと言っています。主体的存在としての科学者は宇宙に見られる様々な自然事象を自分たちが築き上げた科学言語や機具を通して観察し，それらの自然事象のあり方を数式や数字を通して因果的に理解し，解釈していきます。しかし，宗教的人間は常識や科学的思考の流れを『』付けにして，あるがままに自然事象に関わります。そして，突然，自然事象がその時々で日常性を越えた聖なる意味を顕す出来事に出会います。その出会いを経験した人は，その事象を聖なる意味を開示する象徴として理解していくのです。解釈学的現象学は，そうした人々の体験を思い起こし，様々な象徴形態の意味を解読しようとするのだと思います。

ガダマーは『真理と方法』の中で，人間のあり姿と真理の顕れをゲームという考えを通して説明しています。野球を思い起こしてみましょう。野球場という空間があり，その中で，ピッチャーやキャッチャーといったプレイヤーがプレイを行います。多くの人々も観戦者という形でプレイに参与していきます。プレイに参与した人々は，興奮し，喜んだり，残念がったりしながら，不確かなプレイの流れを観戦しているのです。こうした不確かな状況の中で，突然その試合の勝敗を決するような出来事が起きることがあります。そのとき，人々は興奮や感激，悲しみという情感と共に，そのプレイの結果を受け入れていきます。このような，プレイの参与者の意図的企てでは説明のできない出来事的力の顕れをガダマーは「真理」という言葉で語ります。このガダマーの語りは，出エジプト記 3 : 14 に記載されている神がみずからモーセに語った「わたしはある。わ

たしはあるという者だ」という言葉を思い起こさせます。

ガダマーは世界の様々な宗教はモーセと類似した体験を通して顕れたと言っているようにも理解できます。人間の社会にとって重要なことは，真理の顕れの中から生まれた方法ではないかと思います。モーセは流浪の民をカナンの地に導く力を得，十戒という法律を得たことです。様々な宗教家が真理体験を語ることがありますが，その体験がどのような生活に導くか，それが重要ではないかと思います。

最後に

1970 年代の前半，ディヴィニティー・スクールで解釈学的現象学の流れの中で学ぶ機会を与えられたことは，とてもラッキーだと思います。

宗教研究は様々な視点から研究が可能です。宗教と社会に関わる統治構造を研究する人にとっては社会科学的知見が重要です。現在でも多くの研究者がこの立場から研究生活を送られていると思います。

宗教研究には，同時に，宗教の言葉や儀礼形態に支えられながら，生きている人々の姿を理解していく研究も重要ではないかと思います。宗教現象には，痛みや苦しみ，あるいは不条理と言われる状況の中で生きている人々の物語が隠されていることがあります。様々な宗教はそうした人々に独自の言葉と儀礼を通して救済の手を差し伸べています。そのことを理解することが重要です。解釈学的現象学は教派や宗派の言葉を超えて，人間の知性を通して，人間のあり姿を露わにし，宗教現象を理解していく学問と位置づけることもできます。この営みは，高校生の倫理・宗教といった科目を担当する先生方の下支えになると思います。

今回の話が皆様の宗教研究に何らかのヒントになれば，うれしいかぎりです。